The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	薬物シヨック死人体例の研究、特に肝臓及び副腎の組織学的変化について
Author(s)	奥村, 俊明
Citation	大阪大学, 1969, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30017
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【27】

氏名・(本籍)	奥村俊明（おくむらとしあき）
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 1805 号
学位授与の日付	昭和44年9月16日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**薬物ショック死人体例の研究、特に肝臓及び副腎の組織学的変化について**
論文審査委員	(主査) 教授 松倉 豊治 (副査) 教授 宮地 徹 教授 吉田 博

論文内容の要旨

〔目　　的〕

医療の実際に起る，不測の薬物異常反応死，いわゆる薬物ショックの内部素因として，従来より胸腺性体質の他，種々なる程度の肝臓および副腎の機能障害並びにその際の患者の身体状況（特に失血，疲労，不眠，飲酒酩酊等）の影響等が重視せられてきた。しかしそれらに関しての総合的な症例研究ないし報告はほとんどない。そこで私はいわゆる薬物ショック死を総合的に観察し，それを解析することが法医学の実際上には重要であると考え，多数の薬物ショック死例を各症例毎に検討し，特にその肝臓および副腎の組織学的変化程度並びにその相互関係について詳細な観察を試みた。

〔方法ならびに成績〕

昭和34年3月より昭和42年10月までの約8年間にわたる薬物ショック死剖検例64例（男29例，女35例，3才～63才）について，如何なる条件下にそれが発症したかを各症例毎に検討し，一方それらの心臓，肝臓，腎臓および副腎について，一般H・E染色，ズダンⅣによる脂肪染色等によって各組織像の変化程度を観察した。なお消耗性色素の沈着はアルデヒードフクシン染色法によっても観察した。

(1) 全症例の性別，年令別について

男女間に特別の差はなく，どの年令層にもそれぞれ相当数に見られる。

(2) 使用薬剤種別について

各種麻酔剤（特に腰麻）によるものがほぼ半数を占め，ついでピリン剤および抗生物質が多いが，決してこれらに限定されている訳ではなく，その他各種各様のものがショック誘発の動機となっていることは注目せられる。

(3) 剖検上の主たるショック素因について

いわゆる胸腺（リンパ）性体質の他，肝臓障害，および心，肝，腎共に障害のあるものがそれぞれほぼ30％程度にみられる。その外に固有の心臓疾患があったものが10％弱に見られた。

(4) 胸腺性体質の胸腺重量について

その胸腺重量は同年令者の平均標準値（松倉）に比して重く，かつ比重も高くて，胸腺実質として豊富なものが半数以上を占め，残りのほとんども実質豊富であった。

(5) 薬物ショック発現前の身体条件

ショック発現直前の身体的条件に，本来の受診疾患以外に何らかの特殊条件のあったことの判明せるものが半数以上にみられ，特に既往のアレルギー疾患，過労，飲酒酩酊等の条件負荷があると認められるものが多い。

(6) 組織学的検査所見について

（Ⅰ） 薬物ショック死の心，肝，腎および副腎の変化について：心臓，肝臓および副腎では，主として退行変性像，副腎では皮質脂肪減少が見出されるが，特に肝臓および副腎に変化のあるものが圧倒的に多く，肝臓に著明な変化がみられるものが全例の61％，ついで明らかに変化が指摘せられるものが31％，副腎では著明な変化を認めるものが67％，明らかに変化のあるものが30％に見出され，両変化程度を合すると全例の91％に肝臓，97％に副腎の変化が見出された。また，肝臓および副腎の変化程度はほぼ平行的であり，その相関度は著しく高い。心臓では約65％に明らかな退行変性像が見られた。

さらに10才以下の幼年者4例中3例に，心臓，肝臓および副腎に著明な退行変性像を認めた。

（Ⅱ） 他の死因群との比較：

特に肝臓および副腎（皮質および髄質別）の組織学的変化を，他の死因群のそれと比較すると，いわゆる健康急死体（CN 中毒死や急性失血死など）に比して薬物ショック死群のものが変化度がはるかに強く，急性窒息死や CO 中毒死に比しても一般にその変化程度が大きい。さらに脳損傷死や催眠剤中毒死との比較では，ほぼ同程度かまたはそれらより変化が平均的に強く見出される。

（Ⅲ） 消耗性色素について：

薬物ショック死例の肝臓および心筋内消耗性色素の出現程度を他の死因群と比べると，その出現程度が明らかに強く，また年令的にも変化程度の明らかなものが早期に出現している。

〔総　　括〕

以上の検索により明らかな如く，いわゆる薬物ショック死は，臨床的にその態様が一定ではなく，かつその剖検所見も一様でないが，組織学的には肝臓並びに副腎に種々なる程度の変化がそのほとんどの例に常に見出された。これらは，ショック発現の真因がなお不明であるとしても，結局は，体内の種々なる機能系統の相互平衡によって維持されている Homeostasis がその諸機構のいずれかの失調によって破綻をもたらすことによるものと考えられるのであるが，上記の多数症例研究の結果は，その際において肝臓および副腎の潜在的機能障害が重要な役割を果すであ

ろうことを示すものとして，ショック現象理解に役立つものと考えられる。

論文の審査結果の要旨

本論文は，いわゆる薬物ショック死の人体解剖例多数をまとめて資料とし，先づ統計的にその性別，年令別，使用薬剤種別，剖検上の素因並びにショック誘因としての特殊身体条件等を観察した後，特にその肝臓および副腎についての組織学的所見を詳細に検討し，その他の急死例との比較検討をも試み，薬物ショック死例のほとんどすべてに共通してその肝臓および副腎に明らかな退行変性像が他の死因群に比べて強く認められることを確かめ，これら臓器の潜在的機能障害がショック発現の一素因として重要な役割を果すであろうことを示したもので，ショック現象理解に役立つこと多大であると認める。